戦中から戦後

鶴　見　俊　輔

田村さんとその家族のみなさん，おめでとうございます。

高齢になると話が止まらない人が出てきます（一同，笑）。話が止まらない人は大抵の場合，高い位置に登ったことがある人です。わたくしは，高い位置に登ったことがないので多分止まると思います（一同，笑）。それから，みなさんにお立ちいただいているのは恐縮ですが，多分，みなさんの方が若いので，わたくしがここで倒れるまでは，お立ちいただけることと思います（一同，笑）。

『エスニック・ジャーナリズム』という本は，未来的な本です。日本の中に違う人種の方がいます。エスニック・ジャーナリズムを助けることができるかどうかということがまさに我々の問題なのです。そういう意味でこの本は，我々に対して未来への強いメッセージみ持っています。

田村さんは『メディア事典』を編集されています。もしもこの本が60年ほど前に出されたとしたら，いったいこの内容は何のことかと思われるような事典だったでしょう。毎日新聞の社員講堂を借りてコミュニケーション講座を開催したけれども「入り」がよくなかったものです。わたくしがごまかしたりして。参加費をいただいたので非常に困りました。当時は，逓信省を英語で言えばコミュニケーション・ミニストリーだと言ったのですよ。その頃の官僚は英語で話せばお金を出したんです。今も英語の力はありますが，今とはちょっと違うんです。今は，アメリカの大統領が何かを言う前に日本の首相がちゃんとそれを言ってくれます。「イエス，イエス」だけでいいんですから（一同，笑）。60年の間に時代が変わりました。コミュニケーションといっても昔はよくわかってもらえなかった。わたくしは，毎日新聞社の前で人を入れようと思ってがんばったのです。全く個人的にね（一同，笑）。それが今は，立派な内容のある事典ができているのです。手話から何から全部入っているのです。原形は人間個人の体の中にあるコミュニケーションなのです。これがサイバネティックスです。これに対応した図柄を作っていくことがわたくし個人の希望でした。それが田村さんの仕事を通して表われています。60年というものは大変なもので，この本を買う人がたくさんいるんです（一同，笑）

マルクス主義の中にもコミュニケーション論があった。多くのマルクス主義者がそれに気がつかなかった。国家権力を取ることによって気がつかなくなるのです。国家権力を取ったマルクス主義と，国家権力を取ろうとして努力しているマルクス主義とでは，「人柄」がま

るで変ってしまうんです。いったん国家権力を取ってしまうと，マルクス主義のなかにコミュニケーション論が含まれていることを忘れてしまうのです。他の国で，記号論が生まれると，ブルジョアの学問だと言って潰してしまう。腕力で潰してしまうんです。ところが，こっそりと密輸していた。記号論理学をね。そして，人工衛星を飛ばしたのです。アメリカとほとんど同時でした。そういう学者は自然科学者として存在していました。哲学などは，だめだと言って潰されてしまったのです。よっぱっらって暴れる人がいるでしょう。権力を取ったマルクス主義はそれとよく似ています（一同，笑）。今，マルクス主義を国是としている国で見事な成果をあげているところはないでしょう。これは，世界中が認めるところだと思います。アルバニアががんばったのですが，潰れてしまいました。残念なことです。わたくしはアルバニアに行った日本人から帽子を貰いました。今でも家に飾ってあります。自分が被りはしませんけれど。コアラのぬいぐるみに被せています。

コミュニケーション理論はエンゲルスの著作の中にある。労働を共にするためにはコミュニケーションがなければできません。マルクスは，『ドイツイデオロギー』の中で交通（Verkehr）が世界的に広がっていくという世界思想史を著わしています。これは，いわばコミュニケーションの概念に基づく世界思想史とも言えるものです。

レーニンは，国家権力を取りました。レーニンは，フランクという物理学者を無茶苦茶に批判しています。彼はヴィーナー・クライシスの中心人物です。マールというマルクス主義言語学者が出てきたら言語学者は全部彼の主張に鞍替えしてしまった。学者が国家権力によってひっくり返されたのです。ソビエトも日本も国家が大学を作ったのです。だから，どちらも大学が国家権力に奉仕したのです。日本の場合，150 年の歴史がそれを証明しています。

スターリンは，マール言語学をひっくり返しました。スターリンは言語は上部構造と下部構造の両方に働くと考えました。これは，スターリンが実践的にソビエト諸民族の言語と取り組んできた経験に裏付けられたものでした。ところが，スターリンは他の国の理論的先駆者のことについて言及しませんでした。スターリンは国家が一番という態度をかえはしなかった。

学者はそういうことに酔っ払いやすいんです。酔漢になるのですね。

わたくしは，15 歳から 19 歳の終わりまでアメリカにいました。その当時，ナチスから逃れてアメリカに亡命した第 1 世代から第 3 世代の記号論理学者がいました。わたくしは，記号論理学を創ったバートランド・ラッセルをはじめ，ホワイトヘッド，ファイゲル，カルナップの講義を聴きました。カルナップはわたくしの恩師ですが，1 年間ぶっ続きで講義を受けました。第 3 世代についていえば，講師のクワインがいました。彼は，わたくしのチューターでした。彼はまだ 30 歳でした。彼は，「ものと言葉との区別ができるのは，世界の論理学者の中で，タルスキーとカルナップと自分だけだ」と言うのです。ラッセルが「測りきれないもの」（インコメンジュラビリティ）という話をしました。彼は，「この問題は，クワイ

ン先生の方がずっと詳しい」と言いました。その時に，わたくしはびっくりしました。日本ではこんな枕を振るわけがないでしょう。ラッセルの名声，社会的地位は，クワインとはまったく違います。記号論理学は，業績によって人を評価するのです。わたくしは，ラッセルの話を聴いてクワインが偉いということがわかったのです。クワインは3，4年前に京都賞を受賞しました。62年ぶりにクワインに会って，「先生こんにちは」といったらびっくりしていました。私は，牢屋に入れられていたからずうっと会えなかったのです。講演の冒頭で「わたくしにとって最初の弟子は日本人でした」というから，わたくしのことをいってるなと思いながら聞いていました（一同，笑）。

わたくしは，戦争が始まったので交換船で日本に帰ってきました。アメリカを出発するときは19歳だったのですが2ヵ月半も乗っていたので喜望峰をまわるところで満20歳になったのです。日本に帰ってから区役所にいったところが，「東京都の最後の徴兵検査に間に合います」と言われてしまいました。「帰ってこなけりゃあよかった」と思いましたね（一同，笑）。徴兵官は，「親からお金を出してもらってアメリカなんかに私費留学するようなやつは国民として叩き直さなければならない」と思っていたらしくて，「合格！」というのです（一同，笑）。合格であるはずがないのですよ。わたくしは，アメリカで喀血しているし，胸に異常突起がある体です。間違った考えですが，わたくしは，陸軍よりも海軍の方が文明的だと思っていた。海軍のドイツ語通訳として志願しました。ジャカルタにドイツの潜水艦がくるというのでそこへやらされました。海軍の軍属です。オーストラリアに直面している第一線地区なので、ここにいると陸軍から召集されません。戦争中の2年間は，惨憺たる経験をしました。わたくしは日本で小学校しか出ていない。

周りの人は日本が必ず勝つといい，わたくしは日本が必ず負けると思っていました。そして，それは，いいことだと思っていました。ですから惨憺たる毎日でした。

そういう経験をしたので日本人をよく観察することができました。特にびっくりしたのは父でした。父は，第一高等学校英法科（当時そういうものがありました）の首席でした。わたくしは子供の時には日本で父ができる人だと思っていたのに、戦争の旗をふる。

それがわたくしの学問の根源です。

わたくしは、大学出というものを信頼しません（一同，笑）。試験の仕方がどんどん変わります。特に東大を一番で出たような人は，豆腐が脳みそに詰まっているような人だと思っています。それが，わたくしの人生哲学です（一同，笑）。

姉（鶴見和子）は、わたくしと一緒にアメリカから帰ってきました。ところが女だから戦争に引っ張られなかった。アメリカでまなんだマルクス主義を一分一厘もかえないで保っていたのです。そして，みるべき論文を戦争中に書いていた人に目をつけていました。それが「思想の科学」のはじまりです，武谷三男，渡邉 慧，丸山真男，武田清子，都留重人，そしてわたくしでした。

都留氏が学会誌に初めて書いた論文は「意味について」（On Meaning）でした。違う言語が共通の意味を持つという実証的な研究でした。日本語がわからない人に対して，例えば「柔らかい」,「硬い」という言葉のセットを作ると大体意味がわかる。国際的に言語は音韻の共通の意味で基礎があるという論文です。

雑誌を出す時に，わたくしが『記号論雑誌』という名前にしようとして記号論を説明したが，他の六人は全然わかってくれなかった。投票結果は，ただの一票でした。丸山は『思想史雑誌』，武谷は『科学評論』という名前をあげたけれども，それぞれ 1 票だけ。ところが，ふらっと入ってきた上田辰之助が『思想の科学』はどうですかと言ったのですんなりと決まってしまったのです。武谷の全仕事を振り返ってみれば，彼の説でもよかったのです。素人が科学について評論する場を作りたいということですから。そういうことがなければ科学は暴走するのです。二十世紀の現実がそうだったでしょ。

わたくしが，戦争中に考えたことや 15 歳から 19 歳まで勉強したことは，全然生かされないので，他にも仲間を見つけようと思いました。わたしは，アメリカに行く前に波多野完治が書いた『文章心理学』を読んでいました。そのことを思い出したので，彼の家まで訪ねて行きました。そうしたら意外な成果がありました。波多野完治は，早くからピアジェやギュイヨーを読んでいました。わたくしは，デューイやミードを読んでいたので，流派が違います。ところが彼は話がわかる心の広さを持っている人でした。

今の大学生や大学教授は，流派の違う人の話を聞くという心の幅の広さを持っているのでしょうか。偏見を持っているのではないでしょうか。特に，東大で一番の人はそうです。わたくしは，35 年も大学から離れているけれども，偏見を持っています。「持っていない」という偏見を，ね。今日は大学関係者が多いこの席で話ができることを光栄に思っています（一同，笑）。これは，お世辞です（一同，笑）。

波多野さんは，「日本で記号学がわかる人が何人いるかねえ」といいながら，すらすらと 20 人ばかりの名前を書いてくれました。その上，ちょっとの間，家の奥で調べてからそれぞれの住所までも書いて出てきたのです。わたくしは，すごい人だと思いましたね。書いてくれた中には，柳田国男，乾孝，小林英夫など，とんでもない人がいました。

波多野さんが「すごい人」という基礎には，わけがあることを後で発見しました。彼はこのあたり（市谷付近）の小学校を卒業しています。その同級生には永井龍男がいました。波多野は永井との付き合いをずうっと絶ちませんでした。波多野は一高から東大心理を出ました。永井の学歴は小学校だけでした。このような経歴で付き合いが続く人は普通にはあり得ません。東大教授になるような人の多くは，その学歴が「トンネル」を潜り抜けるような感じです。学校は「トンネル」のようなものです。「トンネル」に入っている間に社会とのずれができてしまうのです。波多野はそういう人ではありませんでした。しかも，彼が発表したものは弾圧を受けました。国分一太郎がやっていた生活綴り方運動と連携をとっていたの

です。師匠は城戸幡太郎で，牢屋に入れられてしまうのです。彼らとも連携をとっていました。国分は，「随意選題派」の芦田恵之助という小学校教師に対して一生涯にわたって反感を持っていました。しかし，波多野は，芦田の主張は後にロウジャーズではじめるノン・ディレクティヴ・カウンセリング（非指示的相談）と相通じるものであること，生活綴り方運動が記号論の根の一つであることを直感的に認めたのです。

弾圧された時の「ため」が力になっているのです。この戦争は敗北する，万世一系云々というのは間違っていると主張したグループは，流派を問わず弾圧されました。そして，それに対して同情と連携が生まれました。その中に波多野もいたのです。そういう連帯感があったから，波多野は，他流の 20 人の名前を私の問いに応じてすらすらと書くことができたのです。驚くべきことです。今，そういう人がいるでしょうか。いないと思います。なぜでしょうか。海外とのコミュニケーションの速度が戦争中よりもはるかに緊密で速いからなのです。『思想の科学』は学際的な雑誌なので初めは非常に苦労しました。最初にオリエンテーションを即座にその場で与えたのは波多野でした。62 年もの歴史の中では，出たり入ったりということが多いから波多野がいかに大きな役割を果たしたかということを覚えている方は「思想の科学」の中にもほとんどないでしょう。

今，学問はそれぞれ確立していて，「へり」が決まっています。例えば，それは心理学ではない，それは社会学ではないというふうにです。社会学ならばパーソンズだというふうにです。これは波多野がわたくしに示した態度とは大変に違います。波多野はピアジェから学びました。そして，息子にギュイヨーと命名するほど，ギュイヨーに心酔していました。その波多野が，パースやミードについて学問をした者と話が合うのはどうしてなのでしょうか。今，そんな人はいません。日本の学問の未来は暗澹たるものです。わたくしが大学教授だとか学長だったらそんなことは言えませんが。

体の中の血液のコミュニケーションを基本にするという考え方は，ジェームス以後サイバネティックスにうけつがれましたウイーナーの協力者は神経生理学者ローガンブルースです。生活者はすでに自分の中でコミュニケーションを持っているのです。そういう考え方は，今，実践的に大学に受け入れられていないのです。

今は目立った弾圧はありません。目立たない弾圧はありますが。今は，大学を出たような人でもこの日本に弾圧があることを認めなくなってきています。これは大変なことです。

小学校卒業だけで朝日新聞記者になった最後の方は秋山安三郎でした。R. P. ドーアは，「大学を出ていなければ大きい新聞社の試験を受けられなくなったのは昭和の始めだ」と言っています。こんなことは世界でも早いほうです。

ファシズムはデモクラシーを経て現れます。ドイツのワイマール時代はデモクラシーでした。アメリカは，長い間デモクラシーが続いたけれども，今は全体主義です。ブッシュの 9. 11 の演説を聞いて「あっ」と驚きました。

日本もファシズムではない時があった。斉藤隆夫は粛軍演説をやったので追っ払われてしまいました。今，そのように気力を持っている国会議員は一人もいません。今，ひどい状態にあるということは，大学教育では判らなくなってしまっています。

『エスニック・ジャーナリズム』は，別の視野を開いています。日本でこれを助ける運動が広がれば日本も変わることでしょう。しかしながら，そういうふうになりそうもありません。

そういう状態の中で予言に満ちた本を贈られたということで，わたくしは田村さんに感謝いたします。（拍手）

（本稿は，去る 2005 年 1 月 22 日の田村教授の古稀を祝う会での講話の速記に加筆したものである）